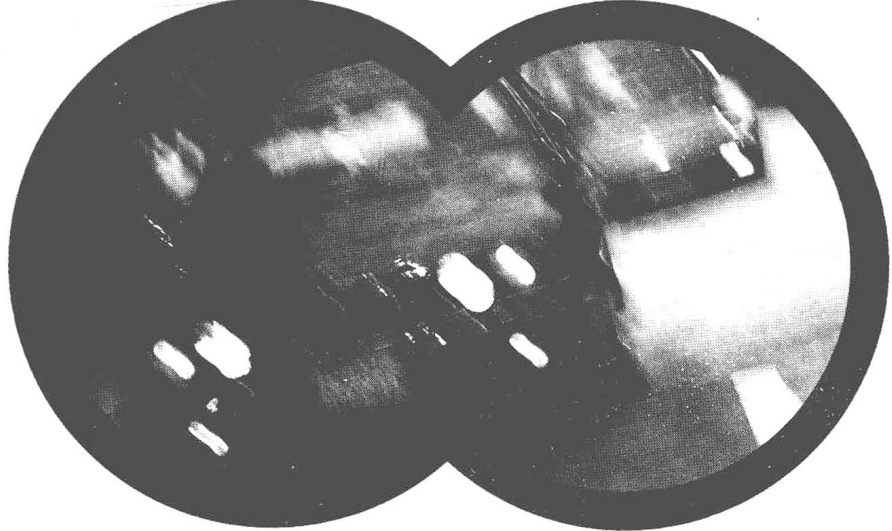


ハポン追跡

逢坂 剛





ハポン追跡

逢坂 剛

ハボーン追跡

第一刷発行 一九九二年九月三十日

著 者 逢坂 剛

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社

〒112 東京都文京区音羽二―一二―二一

電話 編集部 〇三―五三九五―三五〇五

販売部 〇三―五三九五―三六二二

製作部 〇三―五三九五―三六一五



印刷所 株式会社廣済堂

製本所 黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛てにお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部宛てにお願いいたします。

©GO OSAKA 1992 Printed in Japan

ハポン追跡／目次

緑の家の女

5

消えた頭文字

73

首

141

ハポン追跡

189

血の報酬

259

装帧
安彦勝博

ハポ ン追跡

緑^{カサ}の^{ベル}家^デの女

1

掲示板に氣をとられていたので、入口で人とぶつかりそうになった。

「失礼」

体を引いて相手を見ると、顎の細い三十過ぎの男が、軽く頭を下げた。一昔前の、文学青年ふうの男だった。

先を譲り、会場へはいる後ろ姿を見送る。

体つきはやせているが、かなり上背があった。薄茶のコードユロイの上着に、焦げ茶のスラックスをはいている。左足の裾が膝で上へ折り返され、留めてあるのが見えた。

男は片方の足がなく、松葉杖をついていた。

わたしは男と反対側の壁の、入口に近い椅子にすわった。

会場はせまく、しかも五分の入りだった。

いくら映画ファンの数が減ったといっても、これには少々がっかりさせられた。そもそも《エロール・フリンを見る》というテーマが、もはや今目的とはいいがたいのだ。

わたしは月一回開かれるこの催しの案内を、映画雑誌『シネマファン』の先月号で見た。土曜の午後で時間があいていたし、会場の御茶ノ水文化センターがわたしの事務所の近くなので、のぞいてみる気になったのだ。

もっともそれだけが理由ではなかった。

会場でフリンの作品が上映されるほかに、映画評論家の塩谷正彦が『エロール・フリンとスペイン内戦』と題する講演を行なうと出ていた。スペイン内戦に関係があるとなれば、見逃すわけにはいかない。

予定時間の午後一時を過ぎても、人数はせいぜい三十人ほどしか集まらなかった。それも大半が五十代から六十代の人たちだ。おそらく若いころ、エロール・フリンの剣戟映画で育った世代なのだろう。

壁に張られたスクリーンの横に、演壇が置かれている。眼鏡をかけた五十がらみの小柄な男がそこに立ち、『シネマファン』編集長の大坪と名乗った。簡単に開会の挨拶をすませ、評論家の塩谷正彦を紹介する。

引き続き大坪は、エロール・フリンの略歴と作品を駆け足で説明した。会場はしんとして、まるで通夜のような雰囲気だった。

解説が終わると、まず『ロビン・フッドの冒険』が上映された。フィルムの状態が悪く、映画の内容も今の水準からすれば上出来とはいえない。

ところが上映中しばしば会場に溜め息が満ち、活劇場面になると熱狂的な拍手が来たのには驚いた。最初のしんとした雰囲気は嘘のように、会場は大いに盛り上がった。

映画が終わったあと、休憩をはさんで塩谷正彦の講演が始まった。

塩谷はまだ四十代の後半にみえた。眼鏡をかけているが、声も仕草も若わかしい。杉綾模様のブレザーを着て、ペイズリーのアスコット・タイをしている。

わたしは一応、事前に映画関係の資料を読んできたので、エロール・フリンに関する基礎的な

知識は頭にはいつていた。

フリンとスペイン内戦の関わりについては、あまり詳しいことを知らない。リリアン・ヘルマンの自伝『未完の女』の中に、ちょっとしたエピソードが出て来るのを読んだことがある程度だ。リリアン・ヘルマンは米国の有名な劇作家だが、かのダシール・ハメットの愛人としても知られている。

ヘルマンによると、スペイン内戦が勃発した翌年の一九三七年七月、俳優のフレデリック・マーチの自宅で、ある映画の試写会が行なわれた。それは『スペインの大地』という内戦の記録映画で、オランダの映画監督ジョリス・イベンスが、ヘミングウェイらの協力を得て製作したものだ。

この試写会に招かれた客の中に、エロール・フリンがいた。フリンは内戦中のスペインへ行ってきたという理由で、声をかけられたらしい。ところがその席で、共和国政府を援助するために募金が始まると、フリンはトイレへ行くと称して座をはずし、そのままいなくなってしまったという。

どちらにせよ、ハリウッドのスターが内戦中のスペインを訪れたというのは初耳だったので、わたしは塩谷がどんな話をするのか楽しみにしていた。

2

塩谷は手元のメモを見ながら、齒切れのいい語り口で話を進めた。ときどき受けない冗談を言

うので座が白けたが、話自体はなかなか面白かった。

それをまとめるとこういうことになる。

エロール・フリンは一九三七年三月、新聞王のウィリアム・R・ハーストから特派員に任命されて、共和国側のスペインへ渡った。医者で親友の、キーツという男が一緒だった。

当時フリンは、妻リリーとのすさんだ生活や、ハリウッドの退屈な映画作りに飽きあきしていた。そうした現状から逃げ出すためなら、共和国側だろうと反乱軍側だろうと、極端に言えばどちらでもよかったのだ。

スペインへ渡ったフリンとキーツは、アルヘシラスの戦線を視察したとき、残酷な出来事を目撃する。

共和国の兵士たちが、一人の司祭を捕虜にして、河にかけられた丸木橋を渡るように命じた。そして、無事に向こう岸にたどり着くことができたなら、命は助けてやると約束した。司祭は太っており、丸木橋は細かった。

息詰まるようなゲームが始まった。でぶの司祭は法衣をたくし上げ、頼りない足取りで丸木橋を渡って行つた。そしてもう少して渡り切ろうとしたとき、背後の機関銃が火を吹き、司祭の体は蜂の巣にされてしまう。

この事件はフリンに強いショックを与えたい。自分が同情を寄せている共和国が、そのような残酷な仕打ちをするとは、夢にも予想していなかったからである。

その後フリンは、兵士から実戦に参加するようにすすめられ、マシンガンを取って戦線に立つ。しかし映画と現実の間には、大きなギャップがあった。結局フリンは一発も弾を撃たず、前

線から引き上げる。

塩谷はこうしたエピソードを積み重ねて、フリンのスペインでの体験を映画そのままの活劇調で物語った。いささか眉唾臭い感じもあったが、フリンのファンにとっては小気味のいい話だったかもしれない。

講演が終わり、質疑応答にはいった。

わたしは手を上げて発言した。

「もし差し支えなければ、今のお話の出典を教えてくださいませんか」

塩谷はちょっと驚いたようにわたしを見た。

「何かご不審な点でもありますか。わたしは作り話をしたつもりはありませんが――」

「そうじゃないんです。たいへん面白いお話でしたので、ぜひオリジナルの資料を読みたいと思います。ましてね。わたしはスペイン内戦の研究をしているものですから」

塩谷は疑い深い目でわたしを見たが、思い直したように言った。

「今お話したのは、エロール・フリンが自伝の中で書いているエピソードなんです。したがって出典に疑問の余地はありません。ただ、なかなか見つからない本ですよ」

得意げに胸を張る。

そのとき、後ろの方から声が飛んだ。

「その自伝というのは、一九五九年にアメリカで出版された、『My Wicked, Wicked Ways (不道德处世術)』という題の本じゃありませんか」

声のした方を振り向くと、例の松葉杖の男が、首から上を出して質問していた。

壇上に目をもどす。

塩谷はちょっと顎を引き、それから残念そうにうなずいた。

「ええ、そうです。ご存じでしたか」

「原書を持ってますのでね。当時だいぶ売れたらしくて、日本にもかなりの数が出回っているんです。塩谷さんのは第何版ですか」

塩谷はハンカチを出して口元をぬぐった。かすかに顔が赤らむ。

「いや、原書はその、まだ入手しておりません。先日たまたま古書店で、訳書の方を見つけたものですから、それを参考にしてお話し申し上げたようなわけで」

わたしは興味を引かれ、二人を交互に見比べた。

松葉杖の男は、ちらりと冷笑を浮かべた。

「それはC書房の世界ノンフィクション全集の中にはいつている、『ハリウッドの王子』というやつでしょう。確か二十年以上前に出版されたものですが」

塩谷は眼鏡の具合を直し、咳払いをした。

「そうです。あなたもお持ちですか」

「ええ、別に珍しい本じゃないですから。ただあの訳書は、原作の三分の一を抄訳しただけで、しかもかなり誤訳があります。原書をあたればすぐに分かることですが」

男の言葉には妙なとげがあった。塩谷は少しむっとしたように、胸をそらした。

編集長の大坪が助け舟を出す。

「誤訳といっても、話の内容が伝わらないほどの間違いじゃないでしょう」

男は大坪には目もくれなかった。

「問題はほかにもあります。あの本は厳密な意味での自伝ではなくて、エロール・フリンが自分を主人公にして人に書かせた、冒険小説とみるべきものです。訳書の解説で、篠田一士もそう書いていましたね」

塩谷はしぶしぶ口を開いた。

「確かにそういう面もありますね」

男は続けた。

「もう一つある。フリンがスペインへ行ったのは、共和国側に同情したからじゃない。彼はむしろフランコの味方だったんです」

静まり返っていた会場が、かすかにざわめいた。首があちこちに揺れる。

「それはどういうことですか」

塩谷が憤然としたように問い返す。

男は平然と答えた。

「さっきのお話に出てきた、キーツという男がいますね。彼の正体を知っていますか」

塩谷の頬が紅潮した。

「いや——訳書にはただ、キーツとしか書いてありません。医者だということは分かっているんですが。一緒にスペインへ連れて行っただけですから、フリンの親友だったことは間違いないでしょう」

「スペイン行きはフリンではなく、キーツの発案でした。彼はある事情で、どうしても共和国側

のスペインへ潜入する必要があった。そのために有名人のフリンを利用して、無理やり同行したというのが真相です」

塩谷はぼかんとして男を見た。今や全員の視線が松葉杖の男に向けられていた。

「いろいろとお詳しいようですが、それではキーツはいったい何者だったんですか」

塩谷が促すと、男は小さく含み笑いをした。

「本名ヘルマン・フリードリヒ・エルベン博士。この男は、ナチスのスパイでした。彼は共和国の国際旅団に加わっているドイツ人義勇兵の身元を探り出し、本国へ通報する役目を負っていたんです」

会場に驚きの声が上がった。

男が続ける。

「つまりエロール・フリンは、それを自覚していたか否かは別として、ナチスのスパイの手先を務めたわけですよ。だから共和国びいきなどということはありえない。フリンが心情的ファシストだったことは、間違いないといっている」

松葉杖の男が、その日の集いをぶち壊しにしたことも、間違いなかった。

3

そのころわたしは、JR御茶ノ水駅から徒歩五分の曙ビルという古いビルに、現代調査研究所の事務所を構えていた。